

談話室

国際山岳ガイド
のりひで
山岸慎英さん
profile



長野県白馬村出身、1976年生まれ。
飯山南高等学校体育科（現・飯山高等学校）出身。高校卒業までアルペンスキー選手として活躍。卒業後に渡仏し、ヨーロッパアルプスにて、スキー技術・山岳ガイド技術を学ぶ。帰国後は、山用品の開発、登山ガイド、スキー教師、山岳救助隊など幅広く活動している。

——山岳ガイドを始めたきっかけは何ですか？

スキーや登山の盛んな長野県白馬村で育ち、子供のころから競技スキーをやっていました。長野オリンピックの開催が決まってからずっと、オリンピック選手になりたいと思っていましたが、それが難しいとわかったとき、父から「うちの家系は、代々スキーもやっているが、山岳ガイドもしている。競技スキーが難しいのであれば、登山の道に進んでみたらどうか」と言われたのがきっかけです。それから、高校卒業後にフランスに渡り、クライミング的な登山や山岳ガイドの技術を学びました。

——学生時代の思い出をお聞かせください。

高校はスキー専門の体育科に進学しました。アルペン、ジャンプ、クロスカントリー、フリースタイルの4種目に分かれていたのですが、僕は一番人数の多いアルペンという種目でした。学校の授業は午前だけで、午後はずっとスキーのトレーニング。冬の間は学校に行かずにスキーばかりでした。学校に行く時間は少ないのですが、勉強は普通科と同じようにやらなければなりません。体育科だから易しくしてくれるということはずがありません。普通科と同じようにできないと留年もするし、へたすれば退学にもなるのかなと思いながら追われるように勉強していました。

寮に入っていたのですが、朝の点呼から夜の点呼まではずっと監督がいて「腕立てしろ」とか

「走ってこい」などと言われるような毎日で、夜9時の点呼のあとからしか勉強する時間はありません。でも、もう練習で疲れて眠くて眠くて…。それでもなんとか頑張ってテスト前は毎日寝ないで、とにかく詰め込めるだけ詰め込もうとやっていました。

——数学は得意でしたか？

自分は、どちらかといえば文系というよりも理数系なんだろうなと思っていました。というのも、文系の科目は答えが出ないことがすごく多かったり、答えが多すぎたりしたからです。中学や高校の数学は、必ず答えが出ると思うので、それが面白いのかなと思います。勉強する時間がそんなになかったので、数学みたいに式があってそれを活用できれば答えが出るというのはとても楽しかったですね。数学を苦手と思ったことはそれほどなくて、それよりも「これはどこで役に立つんだろう」とか、「こんな難しい計算方法が役に立つのかな」とか、「少なくとも自分の人生には役に立たないんじゃないか」って思いながら勉強していました。大人になってから、役に立たないと思っていたことが、「ここで使われていたんだ！」というのが分かったことがあって、先生が教えるときに「将来、こういうところで役に立つよ」とか「これはこういうところで使われているものだよ」と言ってくればもっと面白かったんだろうなと思います。

歴史が大嫌いで、「つまらないな」と思いながら授業を聞いていたんですけど、大人になってから留学したフランスでは、ルイ何世がどうしたと



カナポレオンがどうしたとか、みんな歴史の話が大好きなんですよ。高校の時ちゃんとやっておけばよかった、世界史をやっておけば話ができたとおもうことができました。やはり大人になってから役に立つということが分からないと勉強嫌いな子たちは余計に嫌いになってしまう。勉強が好きな子には何もなくてもいいけれど、嫌いな子をどうやって好きにさせるかというのが先生の腕の見せ所なのかなって思います。



——スキーやクライミングでは、どのようなところに数学が使われていますか？

例えば、「サイン・コサイン・タンジェントとは何だろう」、「これはどこで使うんだろう」と思っていたら、僕らにはすごく身近なスキーのジャンプ台で使われるんですね。ジャンプ台を滑って飛んで着地する。これをサイン・コサイン・タンジェントに当てはめると安全なジャンプ台ができるんです。これを高校の時に聞いていたら一生懸命勉強したほうがいいかなって思います。コースを作るときには、みんな分度器とメジャーをもって一生懸命計算しながら「この辺まで飛ぶんだから、この角度をこうすればいいのかな」とかやっていますよ。

山の道具も数学が関わっていて、すべての道具にどのくらいの力まで耐えられるか書かれています。ニュートンという単位が使われているのですが、ほとんどのものが22kNまで耐えられます。22kNは2.2tのものが吊り下がるのと同じ力です。人間は重くてもせいぜい100kgくらいじゃないですか。なぜそんなに必要なのだろうと思ったら、クライミングで落ちたときに落下係数というのがかかるのですが、その計算をしていくとだいたい2000kgくらいになってしまう。だから2.2tなんです。メーカーによってはその落下係数の計算式がちゃんと載っていて、こう使うとこういう負荷がかかるので、その負荷がかからないようにクライミングをしてくださいということが書かれてい

ます。ヘルメットも衝撃荷重、ウェアにも浸透圧や耐水圧と、全部に計算式があるんです。スポーツは数字に支配されているというか、数字に守られて成り立っている。数字があって命が守られているんじゃないかなって思います。

次の東京オリンピックから、2人同時に同じ条件の壁を登っていき、そのスピードを競うスピードクライミングという競技が新たに入ります。そこで使われる道具も計算の上に成り立っています。例えばロープは落下係数いくつまで耐えられるとか、クライミングシューズもホールド※も何回の摩擦でどれくらい削れて何回耐えられるといったようにです。壁にも何kgまで耐えなければならぬので梁を何本入れなければいけないといった規格があります。ホールドの角度もミリ単位で全部決まっています。公平を期するために左右の選手に差が出ないようにしなければならず、会場を作るだけでも大変です。

※ 壁を登るときの手がかりや足がかりになる突起物のこと。

——最後に高校生へメッセージをお願いします。

大人になってからも、勉強したことは役に立つんだよと言いたいですね。社会に出たら、知らないよりも何でも知っている方が絶対に優位に立っているので将来への投資だと思って勉強をしてください。そうすれば、夢がかないやすくなるのかなと思います。